

人と家畜の 新たな関係性を求めて

人類の長い歴史を紐解くと、高山地帯、砂漠地帯、ツンドラ地帯などの、環境が厳しくて穀類や芋類などの食糧の栽培が難しいところでも、私たち人類は様々な動物を家畜化し、衣・食・住の源として利用することで生き抜いてきました。現代では、家畜というと肉や乳などの食品、毛や革などの衣料品などの原料にすぎないと考えられがちです。しかし、家畜は貴重な財産であり、家族同様に大切に育まれて田畑を耕したり荷物を運んだりすることに利用され続けてきたのです。エンジンが発明されたからはこのような労役の利用は少なくなってきましたが、今も砂漠の舟としての駱駝や赤道近くで水田を耕す水牛などが活用され続けています。

附属牧場では、馬、牛、山羊、豚など約250頭の大型家畜を飼養し教育と研究・開発に供しています。獣医学や応用動物科学の学生さんたちを主な対象として、家畜を介した感染症や大型家畜の衛生管理などの不足しがちな専門家、畜産物の安全・安心を科学的に保証できる人材などを育成するための実践教育を進めています。この教育取組は、文部科学省大学改革推進事業（現代GP）に選ばれています。

また、優れた遺伝形質をもつ家畜をいかに効率良く増殖するか（家畜繁殖学）、優れた遺伝能力をいかに発揮させるか（家畜飼養学）などの畜産の基盤に深く関わる研究・開発も進めています。

一方、馬の飼育歴が長い附属牧場は、心身障害者のリハビリに役



我が国では東大附属牧場だけで生産されているクリオージョを用いた身障者乗馬の研修会

立つアニマルセラピー（身障者乗馬）の発展・普及にも力を注いでいます。全国から身障者乗馬に関わっている指導者層の人たちに集まってもらって乗馬の飼養・管理法と安全で効果的な乗馬実践法の研修を行っています（写真）。指導者層の教育だけでなく、近くの養護学校の心身に障害のある生徒たちの乗馬体験も行っています。

これらの主役は、アルゼンチン

原産のクリオージョです。この馬は、強健で飼育しやすく、背が低く、性格が温厚なので身障者乗馬に適しており、我国では附属牧場だけが生産して全国の施設に供給しています。このように附属牧場では、家畜を肉、乳、革などの原料として消費することばかりでなく、身障者乗馬のように生きた家畜を広く社会に役立たせることで人と家畜の新たな関係性を模索する研究・開発を進めています。

附属牧場 実験資源動物科学研究室 まなべのほる 眞鍋昇 教授